



●日 時：平成28年2月14日（日） ●会 場：大阪府鍼灸師会館3階

●講 師：日本鍼灸研究会代表 篠原 孝市 先生

●『医道の日本誌』2016年2月臨床に活かす古典 「No.47 臨床」のお話より

（『医道の日本誌』1959年5月～1962年10月、経絡治療座談会の発言を引用しながら）井上恵理が語っている言葉が非常に面白くて、これは私が井上系の経絡治療をやっているからという事もあるのかもしれない。井上恵理はこんなことを言っている。「うちに来る患者さんの50%ぐらいは精神労働をされている方であり、残りは肉体労働の方である」

井上は5時間で90人ぐらいの患者を診ていたといわれている。朝9時から午後2時まで、井上が診た患者の中で半分ぐらいは精神労働の人であった。ここで精神労働というのは、単なるホワイトカラーということでは無い。これは内因性の病のことである。精神労働と言っている意味は五蔵の病、蔵病だと言っている。外因性、外傷性の病と言っているのは筋肉労働をする人の病のことを指している。それは五蔵のところまで病が行っていないものと言っている。精神労働を主体としたものに関しては、五蔵まで病が行っているからこれは本治法が有効である。しかし五蔵まで病が行っていないもの、もっと浅いものというのは必ずしも本治法は必要では無い本治法をしても構わないが、必ずしも必要では無いというふうに分けている。これは、座談会の記事の中で読んでみると見落としてしまうような部分では有るが、考えてみれば非常に画期的な事でもあり、経絡治療が本来目指したものというのは、精神的な労働の患者「五蔵に病が及んでいる患者」を対象とする治療と言える。しかし、肉体労働をすごくやっても五蔵に病が及ぶかも知れない。その場合は直接五蔵の病では無く、外から内に向かってというような発想である。

●至眞要大論篇第七十四注 第十五章～第十六章

第十五章より

帝曰く（いわく）、善し。天氣の變（へん）何如ん（いかに）、と。

岐伯（きはく）曰く、厥陰の司天は、風（ふう）の勝つ所に淫すれば、則ち（すなわち）太虚埃昏（たいきょあいこん）、雲物（うんぶつ）以て擾る（みだる）。寒、春氣（しゅんき）を生じ、流水冰らず（こおらず）。民の病い、胃脘（いかに）、心に當りて（あたりて）痛み、上み（かみ）、兩脅（りょうきょう）を支え、鬲咽（かくいん）通せず、飲食（いんじょく）下らず、舌本（ぜつぽん）強ばり（こわばり）、食すれば則ち（すなわち）嘔す（おうす）。冷泄腹脹（れいせつぷくちょう）、澹泄（とうせつ）し、痲（かし）、水閉（すいへい）す。蟄蟲（ちちちゅう）去らず。病い、脾に本づく。衝陽絶すれば、死して治せず。

帝は言われた。「司天の氣（一年を60日毎六つの期間に分けた第三期で2016年では小満【5月20日】～大暑【7月22日】に当る）に六氣のうちの一つ一つが来ることによって、一年間にどのような自然現象の変化が起こるのか」

岐伯が言うには「厥陰の気が司天に來れば（巳【み】の年と亥【い】の年がそれに當る）、風というものが力を及ぼして、肝の蔵が強くなり脾に影響をおよぼす。太虚埃昏（たいきょあいこん）、空がちりで霞んで暗くなる。雲（天のもの）と物（地のもの）が安定せず天気の変が起こる。本来まだ寒いはずなのに、過剰に暖かくなって流れる水が凍らない（「流水氷らず」は過剰な暖かさを表す表現）。木が土を尅するので胃が痛む。下から上に向かって突き上げていくような痛みがあり、両方の脇が突っ張る。モノを食べてもモノが下って行かない。舌がうまく動かなくなってモノを呑み込めない。食べてもそれがすぐに出てしまう。あまり濁っていない水様便が出てくる。おなかが張る。水様便が出て、腹部に硬結が出来る。小便は全く出ないか又はタラタラとしか出ない。冬の間冬眠している虫が暖かいので地表に出てくる（ここは「蟄蟲去らず」という文章が訓詁【くんご：一つ一つの字句を注釈する】ではうまく解釈出来ないので、「六元正紀大論」「五常政大論」の厥陰司天の項目を参照する）。

病氣は木（蔵は肝）が土（蔵は脾）を尅して影響を与えるので脾の病証があらわれる（この章の病証に関する文章は、『靈樞』経脈篇と『素問』六元正紀大論を組み合わせた文章がもとになっている）。

衝陽の脈が絶えると良くない（古代医学では、「死」という言葉を使っても必ずしも死んでしまうということでも無い。ここでは「良くない」とした）。

 **次回は、至真要大論篇第七十四注第十七章からです。**

（素問勉強会世話人 東大阪地域 松本 政己）